

「目的」

メディアがここ何十年かで力を強化化させているのは、誰もが知っている事実であろう。その中で私たち国民としては、もはやメディアなしでは生きてさえいけないと言っているほど、メディアは私たち国民の中に浸透している。スポーツもまた然りで、現在のようにスポーツがここまで繁栄しているのもメディアのおかげであろう。しかし、メディアはスポーツに対して果たして良い影響だけを及ぼしてきたのだろうか。実際に選手としての立場からメディアを見てみると、必ずしもそうではないことがわかる。視聴率や面白さを求めるあまり、選手そのものを作り上げる行為や発言の前後を端折り全く異なる表現として伝える行為がエスカレートしつつあり、選手側にとっては非常に負担が大きくなっている。このような行為に対して、なんとか変えていかなければこの国のメディアとスポーツは衰退してしまうと考え、選手側から見た提言をすることを本論の目的とする。

「方法」

まず先行研究として、松井秀喜選手とイチロー選手の事例を挙げ、彼らのような世界的にも有名な選手がメディアからどのような創り方をされているのか、また、国民は彼らのイメージをどのように捉えているのかを紹介していく。その上で陸上競技をテーマとして、早稲田大学現競走部員とそのOB,OGである、大前祐介選手・信岡沙希重選手・木村慎太郎選手・八木勇樹選手・佐々木寛文選手の5人の方々にインタビューを実施。事例を挙げ、彼らがメディアからどのような扱いを受けてきたのか、メディアに対してはどのような考えをもっているのかをお聞きし、選手側としての意見をまとめていく。

「結果」

先行研究においては、松井秀喜選手とイチロー選手を対象とし、新聞に書かれている選手を表す“ことば”と国民が抱いているイメージがほぼ合致していることが判明した。また新聞の記事を期間を特定して調べたところ、

いかにイメージを刷り込ませるか、という意図が感じられた。またインタビューに於いても、メディアが選手の発言の真意を伝えていない事や欲しい答えを得るための誘導質問、過度なプレッシャーなど、選手にとって非常に負担の大きい行為が蔓延していた。また、5人の選手が以前に憧れていた選手の取り上げられ方については、現在とは違い、純粋に競技だけを扱っていた傾向にあることも判明した。

「考察」

先行研究における結果からは、メディアが選手を表す“ことば”がそのまま国民が選手に対して抱いているイメージにつながっていることから、メディアが有している力の大きさを計り知る事が出来た。これからのメディアは強い選手だけを取り上げ、尚かつ選手を作り上げるべきではないと考えられる。弱い選手をタレント性に頼って取り上げてしまうと、選手は自身の競技力と人気の差を痛感してしまい、よりプレッシャーを感じてしまう。また、選手を作り上げてしまうと、選手自身は2つの顔を持たなければならない為、休まる場所すらなくなってしまふ。さらにはインタビューの際に、インタビュアーが最低限の知識を身につけていなければ、選手側にとってはさらなるよストレスとなってしまう。よって、インタビューを行う際はそのスポーツを自ら経験し、勉強した上でインタビューをすべきである。また、誘導質問をせず選手が本音を話せる雰囲気を作る必要がある。ただし、メディア側だけが何かを改善するのではなく選手側も変えていかなければならないと考えられる。選手側も強くなればなるほどメディアとの接触が増える為、スポーツ団体が取材などに対し、一元管理をする必要があるのではないだろうか。これらを着実に行動に移していけば、これからのメディアとスポーツの相互発展につながっていくのではないかと考えている。